

人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献

著者	角田 太作
雑誌名	国立国語研究所論集
号	1
ページ	53-75
発行年	2011-05
URL	http://doi.org/10.15084/00000476

人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献

角田 太作

国立国語研究所 言語対照研究系

要旨

日本語には、(1) の構造を持った文がある。その例文は (2) から (4) である。

- (1) 体言締め文または人魚構文
[節] 名詞 だ。
- (2) [太郎は名古屋に行く] 予定だ。
- (3) [太郎は今本を読んでいる] ところだ。
- (4) [外では雨が降っている] 模様だ。

この種の文は奇妙である。意味の面では、例えば、(2) について言うと、太郎は人間である。予定ではない。統語の面でも奇妙である。[節] の部分は、(2) から (4) では、動詞述語文と同じ構造を持っている。しかし、文は「名詞 だ」で終わる。(よって、「体言締め文」と名付けた。) すなわち、前半は動詞述語文と同じ構造を持ち、後半は名詞述語文と同じ構造を持っている。(人魚に似ている。よって、人魚構文とも名付けた。)

先行研究の中には、[節] の部分を連体修飾節とみるものがある。しかし、統語的な振る舞いを見ると、[節] の部分は連体修飾節とは違い、動詞述語文と同じである。

(1) の構造の「名詞」の位置に現れる名詞は、意味・形態・統語の面で、文法化の過程を進んでいる。意味の面では、人魚構文の外で使う場合と意味が違ふことが多い。形態の面でも、統語の面でも、名詞らしさを失っている場合がある。「自立語 → 後接語 → 接尾辞」の変化を遂げたと思われるものもある*。

キーワード：体言締め文、人魚構文、名詞、文法化

1. はじめに

本稿は本研究所で行っている基幹型共同研究プロジェクト「形容詞節と体言締め文：名詞の文法化」(<http://www.ninjal.ac.jp/research/project/a/taigenjime/>) の成果の一部を報告する。

本プロジェクトでは、体言締め文(人魚構文とも呼ぶ)という構文について、日本語とアジアの約 15 の言語を考察している。この研究成果を論文集として刊行する予定である。私は、Tsunoda (in preparation) を準備している。Tsunoda (in preparation) は、日本語の体言締め文を詳細に記述すると同時に、論文集の導入の役目も持つ。

本稿では、Tsunoda (in preparation) に基づいて、主に私自身の考察についてだけ述べる。他のメンバーの研究成果はまだ未公開であるので、本稿では言及しない。なお、本稿は、「中右実

* 下記の二人が人魚構文と近隣の現象との関連を指摘して下さい。 (i) 宮地朝子：副助詞との関連 (11.1 参照)、および、接続助詞のようなものとの関連 (11.3 参照)。 (ii) 影山太郎：接尾辞との関連 (11.8 参照)。お二人の指摘は人魚構文の通時的変化を考察する上で大いに参考となった。John B. Whitman は Kato (1994) の存在を教示して下さい。木部暢子は本論の原稿にコメントして下さい。皆様は心からお礼申し上げます。

先生御退休記念シンポジウム——「明日の言語研究に向けて」——（2011年2月12日（土）、麗澤大学）で行った講演「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」の内容も繰り込んでいる。

上述のように、本稿は Tsunoda (in preparation) に基づいている。本稿の第2節から第10節は角田（1996）を発展・修正したものである。既に角田（1996）で引用した文献は、本稿では必要である、あるいは、有用であると判断した場合にのみ、引用する。

なお、本稿は中間報告である。今後、更に改訂する予定である。特に、第11節は、かなり改訂または加筆が必要になると思う。

2. 人魚構文の原型の定義と例

私は、角田（1996）で、日本語のある種の文を考察して、「体言締め文」（noun-concluding construction）と呼んだ。現在では「人魚構文」（mermaid construction）と呼んでいる。このように名付けた理由は第3節で述べる。

人魚構文の原型は（1）に示す構造を持っている。即ち、はじめに節があり、名詞が続いて、いわゆるコピュラ「だ」で終わる。例文を（2）から（4）に挙げる。（原型から外れるものもある。7.1.2 と 7.2.1 と 7.2.3 と第9節の [1] で述べる。）

- (1) 体言締め文または人魚構文
[節] 名詞 だ。[Clause] Noun Copula.
- (2) [太郎は名古屋に行く] 予定だ。
- (3) [太郎は今本を読んでいる] ところだ。
- (4) [外では雨が降っている] 模様だ。

3. 人魚構文の特異性

人魚構文は日本語では頻繁に使う。しかし、よく考えて見ると、奇妙な構文である。統語の面でも、意味の面でも、奇妙である。更に、世界的にみても珍しいようだ。

[1] 統語の面。

人魚構文は（少なくとも、その原型においては）、[節]の部分だけで、文として使える。（2）から（4）を、（5）から（7）と比較されたい。

- (5) 太郎は名古屋に行く。
- (6) 太郎は今本を読んでいる。
- (7) 外では雨が降っている。

（5）から（7）は、動詞述語文である。一方、人魚構文（2）から（4）は、「名詞」＋「だ」で終わる。この点では、人魚構文は名詞述語文に似ている。名詞述語文とは、（8）のような文である。

- (8) 太郎は学生だ。

即ち、(2) から (4) の類の文は、いわば、前半は動詞述語文であり、後半は名詞述語文である。実に奇妙な構造を持っている。

これらの文を「体言締め文」と呼んだのは、動詞述語文の形で始まるが、名詞（即ち、体言）で締めるからである。前半は動詞述語文であり、後半は名詞述語文である点では、人魚に似ている。このため、これらの文を「人魚構文」とも呼んだ。

[2] 意味の面。

意味の面でも、(2) から (4) のような文は、文字通りの意味を考えると、実に奇妙な文である。例えば、(2) について言うと、太郎は予定ではない。(人間である。)(3) について言うと、太郎はところではない。(人間である。)(4) について言うと、雨は模様ではない。(自然現象である。)

このように、人魚構文は、統語の面でも、意味の面でも奇妙な文である。

[3] 地理的分布。

更に、世界的に見ても、人魚構文は珍しいようである。角田(1996)を書いた段階では、様々な言語の専門家に聞いたところ、人魚構文または類似の構文がある、またはあるらしいのはアイヌ語、韓国語、モンゴル語、トルコ語、チベット語だけであった。本共同研究プロジェクトを開始してから、人魚構文または類似の構文が以下の言語などにある、または、あるらしいことが分かった。琉球語、ユカギール語、コリヤーク語、ダバ語、アムド・チベット語、ネワール語、ビルマ語、ヒンディー語、タガログ語など。全てアジアの言語である。しかし、本共同研究プロジェクトのメンバーの知る限りでは、また、私が諸言語の専門家にお聞きした範囲では、アジアの他の言語には見つかっていない。また、北米、中米、大洋州、アフリカ、欧州の諸言語にも見つかっていない。私が調査したオーストラリア原住民語にも見つかっていない。従って、人魚構文は世界的に見ても、珍しいようである。

4. 「だ」 Copula とその仲間

(2) から (4) では、Copula に当たるものは「だ」である。更に、「だ」の変種と見なせるものもある。以下などである。

(a) 「です」。例は (9)。

(b) 「である」。例は (10)。

(c) 「になっている」。例は (11)。

(9) [太郎は名古屋に行く] 予定です。

(10) [太郎は名古屋に行く] 予定である。

(11) [太郎は名古屋に行く] 予定になっている。

更に、「だ」とその変種は活用もする。「だ」の活用形のうち、「で」と「だった」の例を挙げる。

(12) [太郎は名古屋に行く] 予定で、[花子は京都に行く] 予定だった。

否定形もある。

(13) [太郎は名古屋に行く] 予定ではない。

5. [節] Clause のタイプ

[節] Clause に現れる節には、以下の種類がある。

- (a) 動詞述語節：例は (2) から (4)。
- (b) 名詞述語節：例は (14)。
- (c) 形容詞述語節：例は (15)。
- (d) 形容動詞述語節：例は (16)。

(14) [明夫は天才である] つもりだ。

(15) [明夫は明るい] 表情だ。

(16) [明夫は元気な] 表情だ。

形容動詞の場合には、[節] の述語は連体形である。終止形は使えない。(17) を参照されたい。(この点で、[節] は連体修飾節に似ている。この点について、第9節の [1] で考察する。)

(17) *[明夫は元気だ] 表情だ。

6. 「名詞」 Noun のタイプ

「名詞」 Noun の位置に現れるものは、仮に、以下のように分類できる。

- (a) 実質名詞
- (b) 形式名詞
- (c) 後接語「の」 enclitic =no

実質名詞と形式名詞の区別は難しい。以下は仮の分類である。この分類に賛成しない方もいるであろう。

6.1 実質名詞

「名詞」の位置に現れる実質名詞を、仮に以下のように分類する。

[1] 「意志」の類。

この類に属す名詞は「予定、計画、方針、魂胆、企み、意向、所存、狙い、構え、姿勢、気、気持ち、考え、決心、決意、覚悟、戦術、戦略」などである。モーダルな意味を表す。

(18) [政府は米の輸入を認める] 意向だ。

(19) [太郎はどうしても東京へ行く] 気だ。

[2] 「段取り、見込み」の類。

この類に属す名詞は「段取り、運び、見通し、見込み、予想、方向、流れ、勢い」などである。これらの名詞もモーダルな意味を表す。

- (20) [政府は野党と話し合う] 段取りだ。
 (21) [政府は米の輸入を認める] 見込みだ。
 (22) [雪は夕方まで続く] 予想です。(2011年3月7日(月), JR中央線, 車内電子ニュース)

[3] 「感情」の類。

この類に属す名詞は「感じ, 気, 気持ち, 気分, 思い, 心境」などである。これらの名詞もモーダルな意味を表す。

- (23) [私はやっと目標を達成した] 感じです。
 (24) [私は一人取り残された] 思いだ。

[4] 「状況, 結果」の類。

この類に属す名詞は「模様, 様子, 気配, 状態, 状況, 情勢, 事態, 有様, 形, 格好, 始末」などである。Evidential な意味 (モーダルな意味の一種?) を表すものもある。

- (25) [工場で大きな爆発が続いている] 様子だ。
 (26) [政府は失敗を認めた] 形だ。

[5] 「印象, 雰囲気」の類。

この類に属す名詞は「印象, 感じ, 感触, 趣, 雰囲気, ムード」などである。Evidential な意味に近いと言えるかもしれない。

- (27) [この町は別世界にある] 印象です。

[6] 「習慣」の類。

この類に属す名詞は「傾向, 風潮, 習わし, 風習, 習慣, 癖, 生活」などである。Habitual な意味を表す。即ち, aspectual の一種である。

- (28) [日本人は正月を祝う] 習わし／習慣です。

[7] 「人間の性格」の類。

この類に属す名詞は「性格, 性質, 性分, 気質, たち, タイプ」などである。Aspectual な意味に近いと言える。

- (29) [太郎はいつもみんなを助ける] 性格だ。

[8] 「役目」の類。

この類に属す名詞は「役目, 役割, 責任, 決まり, 掟, 立場, 資格, 運命, 宿命, 定め, 身の上」などである。モーダルな意味, 特に deontic modality に近いと言えるかもしれない。

- (30) [太郎はみんなを助ける] 役目だ。
 (31) [学生は毎週レポートを提出する] 決まりだ。

(32) [裏切り者は殺される] 掟だ。

(33) [花子は結局失敗する] 運命だ。

[9] 「体の特徴」の類。

この類に属す名詞は「体, 体つき, 体格, 体質, 表情, 口ぶり, 姿勢」などである。

(34) [あの力士は立派な] 体格だ。

[10] 「無生物の構成」の類。

この類に属す名詞は「作り, 構造, 内容, 仕組み, 設計, システム, スタイル」などである。
この類は, [9] 「体の特徴」の類に似ている。

(35) [この車は時速 300 キロで走る] 構造だ。

[11] 「時間の関係」の類。

この類に属す名詞は「時間, 前, 後, 直前, 直後, 途中, 最中」などである。Temporal な意味,
または, aspectual な意味などを表す。

(36) [私はもう学校へ行く] 時間だ。

(37) [太郎は丁度出かける] 前だった。

(38) [太郎は丁度出かけた] 後だった。

(39) [太郎は今学校へ行く] 途中だ。

[12] 「疑い」。

この類に属す名詞は「疑い」だけである。これも, evidential な意味に近いと言えるかもしれない。

(40) 県警は前知事を逮捕した。[調べでは建設業界から一千万円をもらった] 疑い。

この例文が示すように, 「疑い」を使った場合, 「だ」は普通, 言わない。

6.2 形式名詞

「名詞」の位置に現れる形式名詞を, 仮に以下のように分類する。

[1] 「つもり」。

意志を表す場合 (例は (41)) と評価を表す場合 (例は (42)) がある。

(41) 意志: [太郎は明日東京へ行く] つもりだ。

(42) 評価: [花子は一所懸命努力した] つもりだ。

[2] 「はず」。

予定, 予期を表す場合 (例は (43)) と悟りを表す場合 (例は (44)) がある。

(43) 予定: [太郎は明日東京へ行く] はずだ。

(44) 悟り：(試験があるのか。)[どうりで花子是一所懸命勉強している]はずだ。

[3]「わけ」。

様々な意味を表す。理由を表す例を挙げる。

(45) 花子是一所懸命勉強している。[合格したい]わけだ。

[4]「もの」。

様々な意味を表す。例えば、(i) 義務，助言：(46)，(ii) 説明：(47)，(iii) 過去の追想，過去の習慣：(48)，(iv) 驚き，強い感情：(49)，(v) 文体的な効果（やや形式張った文体）：(50)，などである。

(46) [男の子は泣かない]ものだ。

(47) 政府は米の輸入を禁止した。[農民の要求に応えた]もの。

(48) [太郎はよく東京へ行った]ものだ。

(49) [うまい酒を飲みたい]ものだ。

(50) [ここに我々は政府の決定に抗議する]ものである。

例文(47)が示すように、「もの」が(ii)説明を表す場合には、「だ」は普通，使わない。

[5]「次第」。

文体的な効果を持つ。やや形式張った文体になる。

(51) [我々は心からお詫びする]次第です。

[6]「方」と「向き」。

Habitualな意味に近い。即ち，aspectualの一種であると言えるであろう。

(52) [花子はよく勉強する]ほうだ。

[7]「一方」。

これも aspectual の一種であると言えるであろう。

(53) [雨が強くなる]一方だ。

[8]「ところ」。

Aspectualな意味を表す場合が多い。例は(54)と(55)である。例は多くはないが、文体的な効果（やや形式張った文体）を持つ場合もある。例は(56)である。これは実例である。

(54) [太郎は今出かける]ところだ。

(55) [太郎は今出かけた]ところだ。

(56) (本研究所のある会議で、ある教授がある人の研究成果について、以下のように述べた。)

[みんな刺激を受けた]ところです。

[9] 「こと」。

(i) 助言, 指示, 義務: (57), (ii) 強い感情: (58), などを表す。モーダルな意味を表すと云えるであろう。

(57) [学生は一所懸命勉強する] ことだ。

(58) [君はよくもそんな嘘を言えた] ことだ。

(例文 (58) は寺村 (1984: 296) の例文に基づいている。本共同研究プロジェクトの研究会でこの例文を用いたところ, この例文では「こと」は使えない, しかし, 「もの」なら使えるという人がかなりいた。)

[10] 「由」。

Evidential な意味を持つ。

(59) [花子が合格した] 由。

人魚構文で, 名詞の位置に「由」を用いた場合には, 「だ」は使わない。

6.3 「の」 enclitic =no

「の」を enclitic と見なすことには問題無いであろう。格助詞と見なす考えもあり, 形式名詞と見なす考えもあり, nominalizer と見なす考えもある。例文を挙げる。

(60) 学生が一所懸命勉強している。[試験がある] のだ。

7. 人魚構文の形態的側面と統語的側面

人魚構文の形態の面 (7.1) と統語の面 (7.2) について, 更に述べる。意味的側面については, 第 8 節で述べる。

7.1 形態的側面

7.1.1 「名詞」

(1) で示した人魚構文の構造において, 「名詞」の位置に現れる名詞には形態的な制限がある。例えば, (61) と (62) と (63) を比べてみよう。(61) は人魚構文ではない。(62) は人魚構文である。

(61) 花子は多忙だ。名古屋に行く予定や, 大阪に行く予定などがある。

(62) 花子は多忙だ。名古屋や大阪に行く予定だ。

(63) 花子は多忙だ。*名古屋や大阪に行く予定などだ。

接尾辞「-など」は, (61) が示すように, 名詞「予定」が人魚構文ではないものに現れる場合には付くことができる。しかし, (63) が示すように, 名詞「予定」が人魚構文に現れる場合は, 付くことができない。

7.1.2 【節】 Clause の述語

(1) で示した人魚構文の構造において, 【節】 Clause の述語の形は, 一般に, 過去形または非過去形である。過去形の例は (23) (達成した) と (24) (取り残された) である。非過去形の例は (15) (明るい) と (21) (認める) と (22) (続く) である。

しかし, 【節】 Clause の述語が形容動詞の場合に限り, 非過去形は使えない。(64) = (17) (元気だ) 参照。非過去形の代わりに, 連体形を用いる。例は (65) = (16) (元気な) である。ただし, 過去形は使える。(66) 参照。

(64) = (17) * [明夫は元気だ] 表情だ。

(65) = (16) [明夫は元気な] 表情だ。

(66) [明夫は昨年までは元気だった] 模様だ。

非過去形の代わりに, 連体形を用いる点で, 人魚構文は連体修飾節に似ている。このことについては, 第9節で更に検討する。

7.2 統語的側面

7.2.1 「だ」とその仲間

(1) で示したように, 人魚構文の原型は「だ」で終わる。(「だ」の代わりに, その変種を使う場合もある。第4節参照。) しかし, 「だ」(またはその変種) が使いにくい場合がある。使えない場合もある。頻繁に省略する場合もある。以下に例を挙げる。

[1] 「疑い」。「だ」は使いにくい。

(67) ?[調べでは前知事は建設業界から一千万円をもらった] 疑いだ。

[2] 「由」。「だ」は使えない。

(68) *[花子が合格した] 由だ。

[3] 「こと」。助言, 義務, 指示などを表す時には, 「だ」は頻繁に省略する。「こと」が終助詞になりかかっていると言えよう。

(69) [学生は一所懸命勉強する] こと。

[4] 予定, 計画, 意図などを表す名詞の場合, 特に, 新聞記事では, 「だ」を頻繁に省略する。

(70) [政府は米の輸入を認める] 意向。

7.2.2 否定

まず, (71) と (72) と (73) を比べてみよう。「名詞」は「意向」である。

(71) [政府は米の輸入を認める] 意向ではない。 (「だ」の否定)

(72) [政府は米の輸入を認めない] 意向だ。 (節の述語の否定)

(73) [政府は米の輸入を認めない] 意向。 (節の述語の否定)

(71) では「だ」を否定している。(72) では、[節] の述語を否定している。「だ」を省略した場合には、当然のことながら、否定できるのは [節] の述語だけである。例は (73)。「だ」の否定はできない。このような名詞は、「意向」のほかにも多数ある。

7.2.1 で見たように、「名詞」が「こと」で、助言、義務、指示などを表す場合には、「だ」は頻繁に省略する。「こと」が終助詞になりかかっていると見えよう。) 従って、この場合、否定できるのは [節] の述語だけである。例は (74)。「だ」の否定はできない。

(74) [遅刻しない] こと。 (節の述語の否定)

7.2.3 いわゆる主語

ここでは「主語」を厳密には規定しない。いわゆる主語である。(日本語の主語を厳密に規定する試みについては、角田 (2009: 177-239) を参照されたい。) 人魚構文で、主語を言えない場合がある。頻繁に省略する場合もある。以下に例を挙げる。

[1]「もの」。強い感情を表す場合には、主語を言えないようだ。隠れている主語は1人称である。

(75) *[私はうまい酒を飲みたい] ものだ。

[2]「こと」。助言、義務、指示などを表す場合、主語を頻繁に省略する。隠れている主語は2人称である。

(76) [家に帰ったら、必ず宿題をする] こと。

7.2.4 「名詞」の修飾語

(1) で示した人魚構文の構造で、「名詞」の位置に現れる名詞を修飾することはできないと思う。少なくとも、例を見たことが無い。例えば、(77) は人魚構文の例である。問題無く言える。(78) では、名詞「予定」に修飾語「急な」が付いている。この文は言えない。但し、人魚構文でなければ、修飾語を使える。(79) 参照。

(77) [花子は名古屋に行く] 予定だ。

(78) *[花子は名古屋に行く] 急な予定だ。

(79) 急な予定ができた。

8. 意味の側面と文法化

人魚構文の「名詞」は、程度の差があるにしても、形態的側面、統語的側面、意味的側面のすべてにおいて文法化していると言える。

意味的側面では、第6節で見た例文が示すように、もとの意味ではなく、別の意味を表す場合が多数ある。以下の三つに分類できる。

- (a) いわゆる文法的な意味を表す場合：モーダルな意味を持つ場合，aspectual な意味を持つ場合，evidential な意味を持つ場合（モーダルな意味の一種？）。
- (b) 文体的な効果を持つ場合。
- (c) 意味を分類するのが困難な場合。

実質名詞の場合，人魚構文で使う場合とその他で使う場合で，意味が違うことがある。形式名詞の場合には，その違いが著しい。語源がもはや（少なくとも私には，語源辞典を調べない限り）分からない場合がある。例は「はず」である。人魚構文では，(i) 予定，予期（例は (43)）と (ii) 悟り（例は (44)）を表す。ところが，語源は、『日本国語大辞典』（小学館，2009，第2版，第10巻：1123）によると，「矢の上端で，弓の弦をかける部分。矢筈」である。同大辞典によると，下記の意味変化をたどった。

「〔「矢筈」と弦とはよく合うところから〕物事が当然そうなること。道理。理屈。筋道。転じて，予定・てはず・約束などの意にもいう。」

更に，語源が分かる場合でも，他で使う場合と意味が違うことがある。

6.2で扱った形式名詞について，人魚構文の外で使った場合の意味と人魚構文の中で使った場合の意味を比較して，表1に示す。

表1 形式名詞の意味：人魚構文の外と人魚構文の中

	人魚構文の外での意味	人魚構文の中での意味
つもり	意図	(a) 意志，決定 (b) 評価
はず	予定，予期	(a) 予定，予期 (b) 悟り
わけ	原因，理由	(a) 原因，理由，説明 (b) 結論 (c) その他，様々な意味
もの	物	(a) 義務，助言 (b) 説明 (c) 過去の経験 (d) 驚き，強い感情 (e) 文体的な効果 (f) その他，様々な意味
次第	過程，経緯	文体的な効果
方，向き	方向	人間の習性
一方	一方向	「ますます」
ところ	場所	(a) aspectual な意味 (b) 文体的な効果
こと	事	(a) 助言，指示，義務 (b) 強い感情
由	手がかり	伝聞

形態的側面、統語的側面では、「名詞」は名詞らしさを失っている。形態的側面では、例えば、7.1.1 で見たように、接尾辞「- など」が付くことができない。この点で、名詞らしさを失っている。統語的側面では、7.2.4 で見たように、人魚構文の名詞を修飾することはできない。この点でも、名詞らしさを失っている。例文 (69), (74), (76) で用いた「こと」は終助詞になりかかっていると見える。この点でも、名詞らしさを失っている。別の品詞に移りかかっている。

人魚構文の「名詞」の文法化については、第 11 節で更に考察する。

9. [節] と連体修飾節との比較

高橋 (1959), 奥津 (1974), 寺村 (1992) などは、私が入魚構文または体言締め文と呼ぶ構文の [節] の部分を連体修飾節と見なす。即ち、人魚構文は、連体修飾節が名詞を修飾する構造を含むと考える。しかし、私の考えでは、[節] の部分を連体修飾節と見なす根拠は非常に弱い。形態的側面と統語的側面を検討する。

[1] 形態的側面。

7.1.2 で見たように、(1) の [節] の述語の形は、形容動詞の場合に限って、非過去形を使えない。連体形を用いなければならない。例文 (64) と (65) 参照。

しかし、連体形を用いなければならないという制限は、非過去形にだけ当てはまる。過去形の場合は、連体形は無い。過去形をそのまま使う。例は (66)。

しかも、非過去形を使わないで、連体形を使わなければならないという制限は、形容動詞にだけ当てはまる。動詞、形容詞などでは、非過去形を使う。そもそも連体形は無い。非過去形の、動詞の例は (80) (読む) で、形容詞の例は (81) = (15) (明るい) である。

(80) [明夫は本を読む] つもりだ。

(81) = (15) [明夫は明るい] 表情だ。

形容動詞の場合に限って、非過去形を使わないで、連体形を用いなければならないという制限は、連体修飾節にも当てはまる。

(82) *[成績が立派だ] 学生

(83) [成績が立派な] 学生

(84) [成績が立派だった] 学生

このように、形容動詞の場合に限って、非過去形を使わないで、連体形を用いなければならないという制限は、人魚構文の [節] と連体修飾節の両方に当てはまる。この点では、[節] の部分を連体修飾節と見なすことは可能である。しかし、根拠は非常に弱い。理由は下記の通りである。この制限は形容動詞にしか当てはまらない。(動詞と形容詞には当てはまらない。) しかも、非過去形にしか当てはまらない。(過去形には当てはまらない。) このように、この制限は、存在はするが、適用する範囲が極めて狭い。

[2] 統語的側面。

[節]の部分の統語的な振る舞いは、動詞述語文、形容詞述語文、形容動詞述語文と同じである。連体修飾節と異なる場合がある。例を挙げる。

(a)「の／が」交替。

「の／が」交替は、連体修飾節では可能である。例文(85)参照。一方、動詞述語文でも、形容詞述語文でも、形容動詞述語文でも不可能である。例文(86)から(88)参照。人魚構文でも不可能である。例文(89)参照。

(85) 明夫が／明夫の 書いた本

(86) 明日 花子が／*花子の 着く。

(87) 今日は花子が／*花子の 美しい。

(88) 今日は花子が／*花子の 元気だ。

(89) [明日 花子が／*花子の 着く] 予定だ。

(b)「話題」の「は」。

(「対照」の「は」は別として)「話題」の「は」は連体修飾節の中には現れることはできない。例文(90)。一方、動詞述語文にも、形容詞述語文にも、形容動詞述語文にも現れることができる。例文(91)から(93)参照。人魚構文にも現れることができる。例文(94)参照。

(90) *花子は書いた本

(91) 花子は名古屋へ行く。

(92) 花子は美しい。

(93) 花子は元気だ。

(94) 花子は名古屋に行く予定だ。

纏めると、「の／が」交替や、「話題」の「は」の用法などの、統語的側面では、[節]の部分は、動詞述語文、形容詞述語文、形容動詞述語文と同じである。[節]が連体修飾節と同じなのは、形態的な側面で、形容動詞に限って、しかも、非過去形に限って、連体形を使わなくてはならないという点だけである。従って、[節]の部分を連体修飾節と見なす根拠は非常に弱い。(私は[節]の部分を連体修飾節と見なさない分析を採用した。第10節で述べる。)

10. 人魚構文の構造

人魚構文の分析について、少なくとも以下の考えがある。

[1] 連体修飾節を含むとみる考え。

第9節で述べたように、高橋(1959)、奥津(1974)、寺村(1992)などは、私の人魚構文または体言締め文と呼ぶ構文の[節]の部分を連体修飾節と見なす。即ち、人魚構文は、連体修飾節が名詞を修飾する構造を含むと考える。高橋(1959)、奥津(1974)、寺村(1992)などの考えでは、人魚構文は、(95)に示す構造を持つことになる。

- (95) 明日, 花子が本を買う 予定 だ。
 連体修飾節 被修飾名詞

(但し, 上述のように, 私の考えでは, [節] の部分を連体修飾節と見なす根拠は非常に弱い。)
 [2] 補文を含むと見る考え。

Nakau (1973) は, 私が人魚構文または体言締め文と呼ぶ構文の[節]の部分を complementation (補文) と見なす。即ち, 補文と名詞は並立する構造を含むと見なすことになる。(96) のように示すことができるであろう。

- (96) 明日, 花子が本を買う 予定 だ。
 補文 名詞

[3] 複合述語を含むと見る考え

上述のように, 高橋 (1959) は, 連体修飾節を含む構造と見る。しかし, たかはし (1979: 157) は, 私の言う [節] と「名詞」の部分を「あわせ述語」と呼ぶ。即ち, 複合述語と見ている。たかはしの分析は以下のように示すことができる。

- (97) たかはしの分析
 明日, 花子が本を 買う予定 だ。
 あわせ述語

但し, 私は「だ」も複合述語の中に入れるべきだと思う。たかはしの分析を少し補うと, (98) のように示すことができる。

- (98) 角田の修正案
 明日 花子が 本を 買う 予定 = だ。
 状況語 主語 目的語 (複合) 述語

[1] 連体修飾節を含むと見る考えと, [2] 補文を含むと見る考えによると, 人魚構文は以下の構造を持つことになる。

- (99) Heavy NP COPULA

即ち, これら二つの考えでは, 人魚構文は以下の特徴を持つことになる。

- (a) 主語が無い。名詞句と「だ」だけからなる。
 (b) 名詞句は Heavy NP である。

この構造は日本語では, 不可能ではない。特に, (a) の構造の例は多数ある。例は (100) である。

- (100) 火事だ!!

しかし, heavy NP と copula だけからなる文は, やや特殊な構造であろう。

一方, [3] 複合述語を含むと見る考えでは, 人魚構文は (98) に示したような構造を持つこと

になる。状況語、主語、目的語、述語を含んでいる。日本語で、極めて普通の構造である。従って、本稿では、[3] 複合述語を含むと見る考えを採用する。

少なくとも、もう一つ分析がある。

[4] 上記の [2] と [3] を合わせた考え。

Kato (1994: 110) は、「はずだ、つもりだ」など、いくつかの表現を含む構造を bridge construction と呼んでいる。この構文は下記の特徴を持っていると述べている。

- a. Complement selection: the bridge nominals select a complement structure in overt syntax;
- b. Bridge nominals as predicates: ..., the nominal may constitute a complex predicate with adjacent verbal elements.

この考えでは、[節] Clause は complement であり、同時に、[節] の動詞は名詞と一緒に complex predicate を成すと思われる。下記のように示すことができるであろう。(98)と同じ例文を使う。

(101) 明日、花子が本を 買う 予定 だ。
complex predicate

complement

(Kato (1994) への言及は John B. Whitman (私信) の教示による。)

11. 通時的变化：名詞の文法化

第2節から第10節までは、人魚構文を共時的な観点から考察してきた。以下では、通時的な変化について、特に「名詞」が経た変化について、考察を試みる。

本共同研究プロジェクトにおいて、日本語や他の諸言語の人魚構文の通時的な変化の研究で、文法化の研究にとって興味深い事実が多数見つかるであろう。

日本語に限っても、人魚構文の名詞が変化して生じたもの、あるいは、人魚構文の名詞が変化して生じたものと思われるものが多数ある。以下では、そのうちのいくつかについて述べる。(本共同研究プロジェクトにおいて、更に詳細が明らかになるであろう。)

以下の考察では、主に以下の変化を見る。

- (a) (independent) word 自立語 → enclitic 後接語 → suffix 接尾辞。
- (b) 名詞 → 副助詞、終助詞、接続助詞のようなもの。
- (c) 具体的な意味 → 文法的な意味など。

11.1 副助詞

人魚構文の「名詞」Noun の位置に、名詞ではなくて、名詞起源の副助詞が現れる場合がある。これは人魚構文が起源であるかもしれない。「だけ」の例と「ばかり」の例を挙げる。『日本国語大辞典』(小学館, 2009, 第2版, 第8巻: 866)によると、「だけ」の語源は名詞「丈(たけ)」である。『日本国語大辞典』(小学館, 2009, 第2版, 第10巻: 1003)によると、「ばかり」の語

源は名詞「計（はかり）」である。

(102) 私はビールを少し飲んだだけです。

(103) 良夫は今ビールを十杯飲んだばかりです。

(人魚構文とこれらの副助詞との関連の可能性は、本共同研究プロジェクトメンバー、宮地朝子の指摘による。)

Vance (1993: 20) の分析では、「だけ」も、「ばかり」も、enclitics でもなく、suffixes でもなく、independent words であると見なすようである。本稿も Vance の分析を採用して、「だけ」と「ばかり」を independent words と見なす。

以下の例は面白い。

(104) (2011 年 2 月に、立川駅で中央線の電車に駆け込んで来た乗客が、携帯電話で、誰かに以下のように言った。)

今、電車に乗ったばかりなものですから…。

少なくとも、以下の二つの点で面白い。

(a) 以下の音の変化を示す。

(105) hakari → bakari → bakkasi

(b) 上述のように、Vance (1993: 20) は、「ばかり」を independent word とみなすようである。一方、bakkasi は、厳密に分析してみないと分からないが、私の考えでは、少なくとも enclitic 後接語になっていると思う。(すなわち、=bakkasi。後接語は直前の等号 (=) で示す。) 更に進んで、suffix 接尾辞になっているかもしれない。(すなわち、-bakkasi。)

11.2 終助詞

6.2 - [9] で見たように、「こと」は人魚構文で使える。この場合は、名詞である。更に、7.2.1 で述べたように、(69) のような場合には、「こと」は終助詞になりかかっていると言えるであろう。(74) と (76) の「こと」も同様である。『広辞苑』(岩波書店, 2008, 第 6 版: 1032) は、例文 (106) を挙げて、「文末にそえて、終助詞的に用いる」と述べている。

(106) 廊下を走らないこと。

11.3 接続助詞のようなもの

人魚構文の「名詞」の中には、接続助詞のようなものになりかけているものがある。寺村 (1992: 299) は、本稿で人魚構文と呼ぶものも扱い、「名詞」の中には、「接続助詞的なものに傾斜していくもの」があると述べている。名詞「ところ」の例を寺村 (1992: 299) から挙げる。人魚構文の例は (107) で、接続助詞のようなものの例は (108) である。

(107) [ちょうど君に電話しようと思っていた] ところです。 (寺村 1992: 299)

(108) 警察で調べたところ、ゴミ箱から指輪と名刺がでてきた。 (寺村 1992: 299)

堀江・パルデシ (2009: 47) は、名詞「ところ」の文法化を考察し、文法化の結果、接続助詞になる場合があることを指摘している。(人魚構文と接続助詞との関連について、および、寺村 (1992: 299) と堀江・パルデシ (2009: 47) についての言及は、本共同研究プロジェクトメンバー、宮地朝子の指摘による。)

11.4 「よう」

『日本国語大辞典』(小学館, 2009, 第2版, 第13巻:492)によると、「よう」の語源は「様(やう)」である。現代語では、人魚構文と殆ど同じような文で用いることができる。Evidential な意味を表す。例文はローマ字で書く。その理由は、例文を見た後、述べる。

(109) *Hanako=wa kinoo Nagoya=ni ki-ta=yoo=da.*

(110) *Hanako=wa asita Nagoya=ni ku-ru=yoo=da.*

(111) *Hanako=no ie=wa tikak-at-ta=yoo=da.*

(112) *Hanako=no ie=wa tikai=yoo=da.*

(113) *Hanako=wa genki=datta=yoo=da.*

(114) **Hanako=wa genki=da=yoo=da.*

(115) *Hanako=wa genki=na=yoo=da.*

現代語では「よう」は自立語ではないであろう。すると、後接語と接尾辞のどちらかである。私は接尾辞と見なさないで、後接語と見なす。理由は以下の三つである。

理由1. 付く相手の品詞が二つ以上である。(109)では動詞に、(111)では形容詞に、(113)では形容動詞に、(116)では格助詞に、付く。(形容動詞に付く場合、非過去形は使えない。連体形を使わなくてはならない。(114)と(115)参照。この点で、連体修飾節と同じである。)

(116) *sora=no=yoo=na iro*

理由2. 直前の語が活用する。(109)と(111)と(113)では過去形であり、(110)と(112)では非過去形である。(115)では連体形である。

理由3. アクセントパターンも融合しない。別々である。例えば、*ki-ta*と*yoo=da*は、二つが一緒に現れても、各自がアクセントの型を保持する。一つの型を持つことにはならない。従って、この点では、*yoo*の独立性が高い。

(117) *ki-ta=yoo=da*

HL HL L

以上の理由で、私は「よう」を suffix 接尾辞と見なさないで、enclitic 後接語と見なす。(Clitics 接語を認定する基準については、Zwicky (1994) を参照されたい。Vance (1993) は、日

本語の助詞が接語であるかどうかについて、詳しく論じている。)。

上の例文では、ローマ字を用い、更に、形態素の境界も示した。このように書くと、ある語が活用しているかどうか、活用している場合には、どんな活用形が分かりやすい。その直後の要素が後接語か接尾辞かを調べるのに便利である。

11.5 「ふう」

『日本国語大辞典』（小学館，2009，第2版，第11巻：681）によると、語源は名詞「風（ふう）」である。現代語では、人魚構文と殆ど同じような文で用いることができる。Evidential な意味を表す。やや古めかしい言い方である。

(118) *Tanaka=sensee=wa kottoohin=o konom-u=huu=da.*

「ふう」も接尾辞と見なさないで、後接語と見なす。理由は「よう」の場合と全く同じ、三つの理由である。

11.6 「そう」：後接語と接尾辞

『日本国語大辞典』（小学館，2009，第2版，第8巻：290）によると、「そう」の語源には、「様（さま）」であるとする説と、「相」の字音であるとする説がある。現代語では、人魚構文と殆ど同じような文で用いることができる。後接語の場合と接尾辞の場合がある。

[1] 後接語。

伝聞を表す。即ち、Evidential の一種である。

(119) *Hanako=wa kinoo Nagoya=ni ki-ta=soo=da.*

(120) *Hanako=wa asita Nagoya=ni ku-ru=soo=da.*

(121) *Hanako=no ie=wa tikak-at-ta=soo=da.*

(122) *Hanako=no ie=wa tikai=soo=da.*

(123) *Hanako=wa genki=datta=soo=da.*

(124) *Hanako=wa genki=da=soo=da.*

(125) **Hanako=wa genki=na=soo=da.*

この「そう」を後接語と見なす理由は、「よう」を後接語と見なす理由の理由1と理由2である。理由3は当てはまらない。

理由1。付く相手の品詞が二つ以上である。(119)では動詞に、(121)では形容詞に、(123)では形容動詞に付いている。(但し、「よう」とは違って、格助詞には付かない。)

理由2。直前の語が活用する。(119)と(121)と(123)では過去形であり、(120)と(122)と(124)では非過去形である。

(「そう」を使った場合、形容動詞の場合、非過去形は使えるが、連体形は使えない。この点で、連体修飾節ではなく、形容動詞述語文と同じである。「よう」の場合の逆である。「よう」の場合、

非過去形は使えない。(114) 参照。連体形を使わなくてはならない。(115) 参照。)

理由3。これは当てはまらない。例えば, *ki-ta* と *soo=da* は, 二つが一緒に現れると, 全体で一つのアクセントの型を持つ。従って, この点では, *soo* の独立性は低い。接尾辞に近いと言えよう。

(126) *ki-ta=soo=da*

HL LL L

[2] 接尾辞。

様子などに基づいた推測を表す。従って, *evidential* の一種であると言える。

(127) *Ame=ga huri-soo=da.*

(128) *Hanako=no ie=wa tika-soo=da.*

(129) *Hanako=wa genki-soo=da.*

この「そう」を後接語と見ないで, 接尾辞と見なす理由は以下の二つである。

理由1。付く相手が活用しない。動詞に付く場合には, 連用形に付く。例は (127) の *huri* である。形容詞に付く場合には, 語根に付く。例は (128) の *tika-* である。形容動詞に付く場合には, 語幹とでも呼べるものに付く。例は (129) の *genki* である。

理由2。「そう」が付いた形全体で一つのアクセントの型を持つ。従って, この点では, 「そう」の独立性は低い。接尾辞に近いと言えよう。

(130) 「降りそうだ」 *huri-soo=da*

LH HLL

(131) 「来そうだ」 *ki-soo=da*

L HLL

(しかし, 「そう」がアクセントの滝を持っている。この点では, 独立性があると言える。従って, 接尾辞とは分類しても, やや独立性がある。やや後接語に近い。)

11.7 「気味」: 自立語 (名詞) と接尾辞

秋元 (1998) は, 文法化の観点から, 「気味」が名詞から接尾辞に変わる過程を考察している。秋元は, 「体言締め文」という用語も, 「人魚構文」という用語も使っていない。しかし, 秋元 (1998: 13) が挙げた例文の中には, 少なくとも大正時代の例文の中には, 人魚構文の例がある。意味は, *evidential* の一種であろう。

(132) [少し温気に蒸される] 気味であった。

(夏目漱石『行人』, 大正1年) (秋元 (1998: 13) から引用)

(133) [そしてやめようと仲田の云うのを心配する] 気味だった。

(武者小路実篤『友情』, 大正8年) (秋元 (1998: 13) から引用)

昭和期では、名詞としての用法の例は少なくなり、「圧倒的に接尾辞の使用例が多くなっている」（秋元 1998: 14）。まず、名詞の例を挙げる。

(134) このところ少々やりすぎの気味はあったが、（後略）

（司馬遼太郎『国盗り物語』，昭和 38 年～ 41 年）（秋元（1998: 14）から引用）

秋元は、昭和期については、明らかに人魚構文であると言える例を挙げていない。私の直感では、「気味」は人魚構文では使えない。

次いで、接尾辞について考察する。『日本国語大辞典』（小学館，2009，第 2 版，第 4 巻：266）によると、接尾辞「気味（ぎみ）」は、「名詞や、動詞の連用形に付いて名詞，形容動詞をつくり，そのような様子，傾向にあることを表す」。秋元（1998: 15）から引用して、昭和期の例を挙げる。名詞に付ける例は（135）で、動詞の連用形に付ける例は（136）である。

(135) ……睡眠不足が加われば，多少妄想気味になるのもやむを得まい。

（安部公房『砂の女』，昭和 37 年）（秋元（1998: 15）から引用）

(136) とくに青木弁護士の指摘は鋭く，弁護側のほうが押しきみだった。

（星新一『人民は弱し，官吏は強し』，昭和 42 年）（秋元（1998: 17）から引用）

動詞の連用形に付く接尾辞「気味」が，人魚構文から変化した可能性がある。例えば，（136）は，（137）（角田の作例）のような人魚構文から変化した可能性がある。

(137) [弁護側のほうが押す] 気味だった。（角田太作，作例）

「気味」が名詞から接尾辞に変わる過程で，後接語である過程を経た可能性が高い。しかし，秋元（1998）は，後接語の段階を経たかどうかについては述べていない。（現代語の話者の中には，「気味」が後接語の段階にある人がいるかもしれない。）

11.8 接尾辞「気」

影山太郎（私信）は，下記の例文を挙げて，これが人魚構文に由来する可能性があることを指摘した。

(138) 彼は水を飲みたげだ。（影山太郎，私信）

『日本国語大辞典』（小学館，2009，第 2 版，第 4 巻:1199）によると，接尾辞「げ」の語源は「様子の意を表す体言「け」」である。その働きは「体言，動詞の連用形，形容詞の語幹などに付いて，様子，けはい，などの意を表す」。

11.9 まとめ

11.1 から 11.8 まで，人魚構文の名詞に由来する（あるいは，由来する可能性のある）後接語と接尾辞の例を見た。（他にも多数あるだろう。）

これらは、第 11 節のはじめで挙げた、三つの変化を経た可能性が高い。

- (a) (independent) word 自立語 → enclitic 後接語 → suffix 接尾辞。
- (b) 名詞 → 副助詞, 終助詞, 接続助詞のようなもの。
- (c) 具体的な意味 → 文法的な意味など。

特に、(a) の変化を経た可能性のある名詞がある。それは下記である。

(139) 名詞： 様 (さま) または相。(「相」の発音は「そう」かどうか不明である。)

後接語： = そう =soo

接尾辞： - そう -soo

(a), (b), (c) の変化の過程で、上で見た後接語と接尾辞は、自立語らしさを失っていった。但し、後接語の中には、使う条件によって、名詞らしさを(少しは)保っているものもある。その例は「風(ふう)」である。『学研国語大辞典』(学習研究社, 1981: 1686) は、「風(ふう)」の意味として、「性格的な傾向。性向。」を挙げている。(これは (118) の「風」の意味に近い。) 以下の文を挙げている。

(140) 意識しないで生活を楽しむという風が英男にはあった。

但し、文語・文章語で用いるとしている。私自身は (140) の言い方をしない。しかし、この言い方をする人の日本語では、「風(ふう)」は名詞らしさを保っている。例えば、格助詞が後続できる。

12. 結語

本稿は、はじめに、日本語の人魚構文を、意味的側面、形態的側面、統語的側面などについて、考察した。次に、人魚構文の名詞がたどった(あるいは、たどった可能性のある)通時的变化を考察した。

第 3 節で述べたように、人魚構文は世界的に見ても珍しいようである。現在の段階では、人魚構文(あるいはそれに類似したと思われる構文)は、日本語を含めて、アジアの約 15 の言語にしか見つかっていない。従って、本共同研究プロジェクトで、人魚構文(あるいはそれに類似したと思われる構文)の存在を報告して、記述するだけでも、意義のある研究である。

更に、本共同研究プロジェクトの成果は、文法化の研究にも大きく貢献するであろう。諸言語の文法化の研究では、動詞を扱ったものは多数あるが、名詞を扱ったものは少ないようである。

共同研究は、最終的には下記を目指す。

- (a) 人魚構文の地理的分布を明らかにすること。
- (b) 人魚構文の音声、形態、意味、統語などの面の性質を明らかにすること。
- (c) 文法化の研究に貢献すること。

参 照 文 献

- 秋元美晴 (1998) 「文化化現象の一例——名詞「気味」から接尾辞「一気味」への変遷——」『恵泉女学園大学人文学部紀要』10: 3-22.
- 堀江薫・ブラシャント＝バルデシ (2009) 『言語のタイポロジー』東京：研究社.
- Kato, Yasuhiko (1994) Negative polarity and movement. *Formal Approaches to Japanese Linguistics 1 (The MIT Working Papers in Linguistics 24)*: 101-120. Cambridge, MA: Department of Linguistics, MIT.
- Nakau, Minoru (1973) *Sentential complementation in Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』東京：大修館書店.
- 高橋太郎 (1959) 「動詞の連体修飾法」『ことばの研究』, 国立国語研究所論集第1集：169-182. 東京：国立国語研究所.
- たかはしたろう (1979) 「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」言語学研究会 (編) 『言語の研究』75-172. 東京：むぎ書房.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』東京：くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1992) 「連体修飾のシンタクスと意味 (その1~4)」『寺村秀夫論文集I：日本語 文法編』157-320. 東京：くろしお出版.
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」鈴木泰・角田太作 (編) 『日本語文法の諸問題：高橋太郎先生古希記念論文集』139-161. 東京：ひつじ書房.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語』, 改訂版. 東京：くろしお出版.
- Tsunoda, Tasaku. In preparation. Mermaid construction: Introduction, with illustrations from Japanese.
- Vance, Timothy J. (1993) Are Japanese particles clitics? *Journal of the Association of Teachers of Japanese* 27(1): 3-33.
- Zwicky, A.M. (1994) Clitics. In: R. E. Asher et al. (eds.), *The encyclopedia of language and linguistics* Vol. 2: 571-576. Oxford: Pergamon Press.

Mermaid Construction: A Contribution from Japanese Linguistics to General Linguistics

TSUNODA Tasaku

Department of Crosslinguistic Studies, National Institute for Japanese Language and Linguistics

Abstract

Japanese has a construction whose structure may be shown as in (1). Examples include (2) and (3).

- (1) Noun-concluding construction/mermaid construction
[Clause] Noun Copula.
- (2) [*Taroo=wa Nagoya=ni ik-u*] *yotee=da*.
'Taroo plans to go to Nagoya.'
Literal translation: 'Taroo is a plan to go to Nagoya.'
- (3) [*Taroo=wa ima hon=o yon-de i-ru*] *tokoro=da*.
'Taroo is reading a book now.'
Literal translation: 'Taroo is a place to be reading a book now.'

This construction is unusual. Semantically, regarding (2), for instance, Taroo is a human, and he is not a plan. Syntactically, [Clause] of (2) and (3) has the structure of a verb-predicate sentence. However, the construction ends with 'Noun Copula'. (Hence, the label 'noun-concluding construction'.) That is, the first part of (1) has the structure of a verb-predicate sentence, but its second part has that of a noun-predicate sentence. (Therefore, this construction resembles a mermaid. Hence, the label 'mermaid construction'.)

There are previous studies that regard [Clause] of (1) as an adnominal clause. However, syntactically, [Clause] behaves like a verb-predicate clause, and not like an adnominal clause.

The nouns in the slot 'Noun' are undergoing grammaticalization. Semantically, they often have a meaning that is different from the meaning they have when they are used outside the mermaid construction. Morphologically and syntactically, these nouns are beginning to lose certain aspects of their noun-hood. There are instances that appear to exhibit the following change: word → enclitic → suffix.

Key words: noun-concluding construction, mermaid construction, noun, grammaticalization